

M  
|

黛 敏郎

(作曲家)

Toshiro Mayuzumi

芸大に入りたての頃だったろうか。それとも二年になってからかもしれない。ぼくは学校の食堂の隅で、仲間数人と馬鹿ばなしをしていた。午後の三時ぐらいだった。季節ははつきり覚えている。梅雨だった。じとじとしていた。食堂は学生たちで満員だった。

いきなり反対側の入り口の、たてつけの悪い戸が、すごい音をたてて開いて、女子学生が息を切らしてとびこんで来た。たばこの煙もうもうで、それに、なにしろ若い学生でいっぱいなのだから、ガヤガヤぶりも相当だったのだが、その女の子の血相かえたとび込み方の迫力に、食堂中が一瞬シーンとなった。

「マユズミさんがカツラギさんと校門……」と叫んで、あとはハアハア喘あえぐだけだった。きつと、かなり遠くの、通称美校の門、つまり美術学部の入り口の方から歩いて来る黛夫妻を見かけて、一

刻も早くと走って来たのだろう。

食堂中が一斉に立ち上がった。みんなわれがちにと走って出て行った。女の子は黛さんを見るために、男の子は桂木さんを見るために。

「チョッ、新進作曲家が何だつてエンダ。松竹のスターがナンデエ。あさましいなあ。あんなに走って行きやがつて。見たきゃ、どうせあとでここに来らあナ」

打楽器科の同級の白木秀雄がつぶやいた。食堂にはぼくら二人だけが懽然おぼぜんとしていただけだった。本当は二人とも走って行きたかったのだが、お互い、牽制けんせいし合う何かがあったのだ。

何分かして、黛敏郎、桂木洋子の御両人が静かに食堂に入ってきた。

「アラ、しばらく、セエーンセ！ おかわりなくてえ？」

と食堂のおばさんがハシタナイ大声を出す。もっとハシタナイのは、さつき走って出て行った大勢のヤツラだ。夫妻の五メートルぐらいあとを、ゾロゾロ無言でついて来る。ミーハーっていうのは、だからイヤになっちゃう。

でも、なるほどスターというのはああいうものなんだなあ。まわりのムシケラ共には目もくれず、

「うん、おばさんも元気？」

なんて涼しい声で言っている。映画スターの方は、ただ黙って作曲のスターに寄り添っているだけだった。それがまた、一層尊く見えるのだ。

「チキシヨウ、おれもああなりてえなあ」

と、となりの白木がつぶやいた。当時もう、白木は世の中でかなりのスターだったのだが、ジャズドラマーには、大勢の尊敬の眼差まなざしの真ん中に立っている黛さんが、よほどうらやましかつたのだろう。作曲家がスターで、しかもオクさんが映画スターだなんて邪道だ、作曲家というものは、ピンボウくさくなきゃあ、なんて思いながら、ぼくの目も黛さんの一分すきの隙もない着こなしぶりのうしろ姿に釘くぎづけなのだった。

古今東西、無数の作曲家の中で、黛さんのように、作曲家としてのデビューの最初から、きらびやかな存在だったという人は、まず絶無なのではないかと思う。音楽学校の卒業作品一発で世の話題をさらい、遠いヨーロッパの国際作曲賞もこの作品でもぎとり、ジャガー——正確にはジャグワールのスポーツカーを乗りまわして、週刊誌の掲示欄に「日本で時速二百キロで走れる道路があったら、お教え下さい」なんてカッコイイことを書きちやったり、人気映画スターとポンと結婚したり、世の人にはすこぶる難解なはずの作曲をし、ミュージック・コンクレートとか電子音楽なんてものに誰よりも先に取り組み、だからこそ前衛の旗頭で、不思議なことに、こういう仕事なのにウンと稼ぎ、チャラチャラのタレントとは違い、日本中の尊敬とあこがれにつつまれた本物のスターだったのだ。しかもこれは昭和二十年代の後半の、日本がまだまだピンボウだった頃のことだから、驚嘆のほかはない。勿論、そういう時代だったから、ということと言えるだろうが、でもそれからずっと現在まで、黛さんはスターのままなのである。

昭和三十三年の「涅槃ねはん交響曲」の衝撃的な発表は、大袈裟ではなく、その後の日本の作曲界の方向を全く変えてしまった。しかも同時に、彼は日本の最初の世界的な作曲家になったのだった。そ

の後の作曲家としての作品の産み出し方は、少し静かになってしまつて、音楽家のぼくにはちよつときびしいのだが、テレビのコマーシャルにバンと派手に出た最初の作曲家も彼で、これだつて前衛的影響を他の作曲家に与えたという点で、「涅槃」に較べたくなる。

「題名のない音楽会」の司会ぶりというより、あの番組自体、黛さんそのもので、あれを何百回も続けていたら、作品の数も減るだろう。歌劇「金閣寺」をベルリン・オペラのために書きあげているけれど、今の黛さんの音楽的行動は「題名」をえんえんと続けて、一部の現代音楽好きだけにではなく、全国の大きな聴衆に、音楽啓蒙けいもうの運動をするのにしぼられているようだ。これも前衛的な態度を持ち続けている姿勢と思える。

「題名」にしぼっているわけではないかもしれない。超保守的な多方面の思想的行動がある。この「超保守」も、彼の前衛精神のほとぼしりだと、ぼくは理解している。

食堂の隅で、本当はあこがれていたのに、テヤンデエなんて白木とヒガンでいた時から二、三年の後に、ぼくはあのスターと直接口がきけるようになった。チンピラ指揮者だったのに「涅槃交響曲」の世界初演の指揮をさせてもらつたり、黛さんには様々の世話になつて、以来ずっとファンのままで、誰かが右翼ぶりをカラカツたり、最近の創作の少なさにケチをつけたりする時、ぼくはいちいちムキになつて怒るのだ。

昭和三十三年の夏だつた。第二回の軽井沢現代音楽祭のために書いた黛さんの作品に、「阿咩あうん」  
というのがある。大鼓おおつづみと小鼓と笛の、三人の奏者のための室内楽だつたが、作曲者は西洋のオタマ

ジャクシで書いていて、当時はこういう和楽器の奏者で西洋楽譜が読める人が非常に少なかった。そこで口説かれて、小鼓をぼくがやることになった。小鼓なんてやったことがなかったので、あわてふためき、知人の宝生流に何回か通って、チーとかポなどの打ち方をインチキながらも、なんとか出来るようになった。

大鼓は、これも本職が見つからず、作曲者が自ら演奏することになり、黛さんは何流かに駆けつけて手ほどきを受けたのだった。笛吹きもいなくて、かわりに先年亡くなった林リリ子さんがピッコロでやることになった。

大鼓と小鼓が、お互い、何回かのレッスンをそれぞれすませて、そろそろ合わせの稽古にかかれそうになって来た頃、電話がかかって来た。

「どう、調子は？　ところで、今これから二時間程時間ないかい？」

間もなくジャガー運転の黛さんがやって来て、どこに行くのかも知らぬまま、着いたのは日本橋の三越だった。

「生まれて初めて人前で鼓を打つんだから、二人で揃そろいのちゃんとした恰好をしようと思ってね、君の分は記念にプレゼントするよ」

それでも何のことか分からず、どんどん歩いて行く黛さんに従って、三越のエレベーターに乗ったのだった。

「次は○階、呉服売り場でございます」

の声で、ぼくはやつと、何のための三越本店かが分かったのだ。そう言えば四、五日前に、いき

なり電話で、背丈と体重をきかれたっけ。家の紋は何だ、なんてへんな事を尋ねたのもこのためだったのか。今日は紋付き、袴はかまの仮縫いなのだ。ジャガーに乗って——昭和三十三年頃の日本に、ジャガーのスポーツタイプなんて、何台あったろう——三越本店の呉服部とは、いかにもこの人らしいと感にたえたのだった。

「イヤ—アツ、ポン」

と何回か二人で練習した。ドシロウトの二人がやっても、日本人が日本の楽器を持つと、どちらかがかける「イヤ—アツ」のあとの「ポン」が絶妙にピッタリ合って、西洋風に三、四と指揮をされたって、こうは合わないね、とぼくが感心すると、だから「阿吽」というんだと、作曲者は威張るのだった。

軽井沢のステージ練習では、——星野温泉の旅館の大広間が、われわれのカワイイ現代音楽祭の会場だった——ピッコロの林リリ子さんが、どうしてもとだだをこね、鼓の二人が紋付き、袴で正座している真うしろに屏風びょうぶをたて、その蔭でピッコロを吹くのじゃないといやだというのだ。黛さんが彼女の和風正装のことを忘れていたのか、リリ子さんは洋服だけで軽井沢に来ていて、紋付き、袴のわれわれの横にツウ・ピースでは恥ずかしいのかと思ったら、さにあらず、ぼくたちの「イヤ—アツ」の時の顔を見る度に、笑いころげてしまつて、ピッコロが吹けないのだ。ぼくだつてしよつ中ニタニタして、それでも「ポン」とたたけるのだが、笛吹きが吹き出したら、音にはなるまい。だから本番では、正座の鼓二人のうしろに、豪華な金屏風がたてられ、姿のない「パイ—」が聞こえたのだった。

演奏会では、旅館の大広間を埋めつくした聴衆は、といつても二百二、三十人だが、終始、われわれの「イヤーッ！ポン、ヤッ！ポン」に抱腹絶倒、笑いころげていた。「イヤーアッ！」とやりながら、ぼくには見えたのだが、指揮者の森正さんなんか、われわれの勇姿を撮ろうと何十回もカメラをかまえ、シャッターを切るたびにプツと吹き出して、結局は一枚も撮れなかった様子だった。

ひとり、大鼓奏者だけは、一度たりとニヤリなんてしなかったのだ。左の小脇に大鼓をかかえ、かたい紙をまきつけた右の人差し指と中指でハッシとタイコを打つ時も、カン高い、ホソイ声で「イヤーアッ」と叫ぶ時も、無念無想に半ば目を閉じ、いと高き「阿吽」の境地におわしましたのだ。

時々屏風のうしろから、笛の音ならぬ、ケツケツケがきこえて来る。ぼくはといえば、やはりハシタなくもお客の誰かれと目が合うと、どうしてもニヤリとしてしまい、共演者でありながら、少しばかり見物側の気持ちもあって、「ポン！ ポ！」とやりながら右隣の大鼓の顔を横目で盗み見してしまう。目を半ば閉じていることは、半分開けていることにもなるが、これは楽譜を見ているからで、譜面を読む時に、目の前の笑いころげている客と目が合いそうなものだが、心魂の神性はいささかも動かされてはいないらしい。

終わって、満場大拍手大爆笑の中を、打ち合わせ通りに両手をついて深々と辞儀し、その時もぼくはニタニタしてしまい、となりは固い表情のままパーフェクトだった。

楽屋で彼は初めてニコリとした。リリ子さんとぼくに、

「うまくいったね。有難う」

と言った。ニコリはおかしかったのではなく、ぼくたちへのねぎらいだったのだ。この「阿吽」とそっくりなのが娘道成寺の一部にあつて、「阿吽」は現代音楽界への痛烈な諷刺ふうしなのではないかと何度も尋ねたのだが、答はいつも「NO」だった。

時々思うのだが、黛さんの行動のすべてが、非常に高い次元からの、世の中へのカラカイのような気がするのだ。きけば無論「NO」だろう。われわれにそう思われるのは百も承知で、彼の言動はやはり真面目、真剣そのものなのかもしれない……とまたこう思わせておいて、本当は……というように、もしかしてこの人は宇宙からか、四次元からの人かもしれない。つきあい始めてから二十年以上経つ。ぼくはいつも黛さんが好きだし、尊敬している。だが不思議な人である。